□作品紹介□

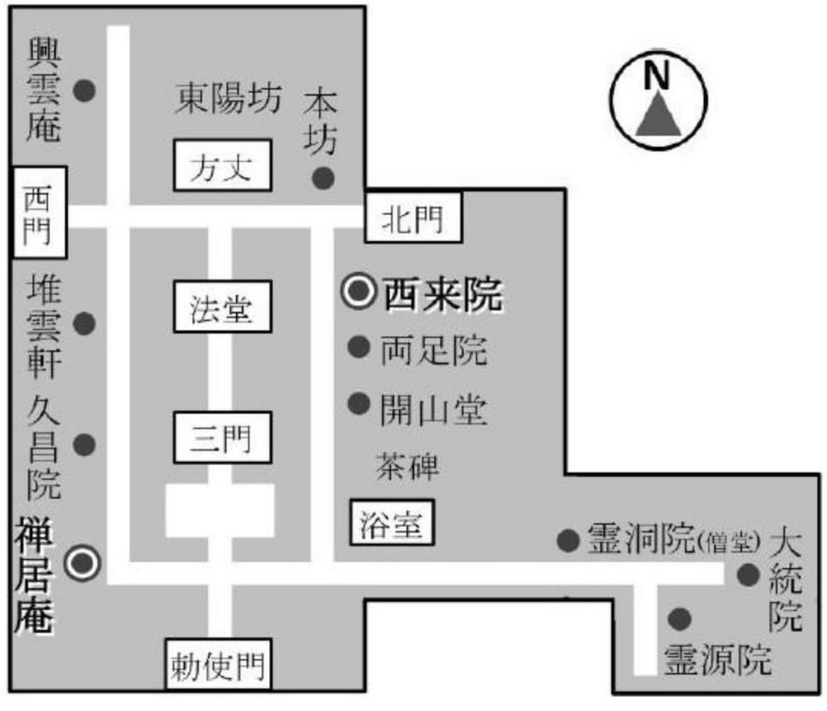
〈パンフレット編集者より〉

本パンフレットをお手にとってくださり、ありがとうございます。

思い切って横向きにしてみました。見やすさなどいかがでしょうか？

パンフレットは、すべての作品の魅力と、書に寄せる想いを記録しお伝えする使命を担った、いわば一つの合作だと考えております。会場の作品に比べると一回りも二回りも小さいですが、この二日間を詰め込んだ一作品として、書展が無事終了したあとも、ふと思い出したときに再びご覧いただければ幸いです。

（パンフレット編集担当　柳澤杏衣）



―賛助作品―



西来院会場　「風過ぎて鳥香を銜む（田有年）」　八つ切

「風過鳥銜香」

自由奔放な筆致で、豪快さを表現して余白の美しさを楽しんでみました。

技術顧問　寺本蒼玄先生

禅居庵会場　「學優に文麗なる至通なり」　半紙

「学優文麗至通也」

単体で行をつくり、品格のある作品を求めて仕上げたつもりです。



―合同作品―

―全体合作―

「七夕飾り」

6月はじめとかなり気が早いですが、書道部の七夕をお楽しみいただけましたか？

中国でも七夕をお祝いしますが、願い事を書いて笹を飾るのは日本だけだそうです。なんだか意外ですね。今回の合作で日本の文化を感じていただければ幸いです。

（合同作品担当　池田亜由美）

―三回生合作―

「お気に入りの本の帯」

この一年間、幹部回生として一緒に頑張ってきた三回生の合作です。お気に入りの本を持ち寄り、本の帯にコメントをつけました。少人数ながらも個性豊かな私たちをよく表す合作となりました。ぜひ手にとってご覧ください。

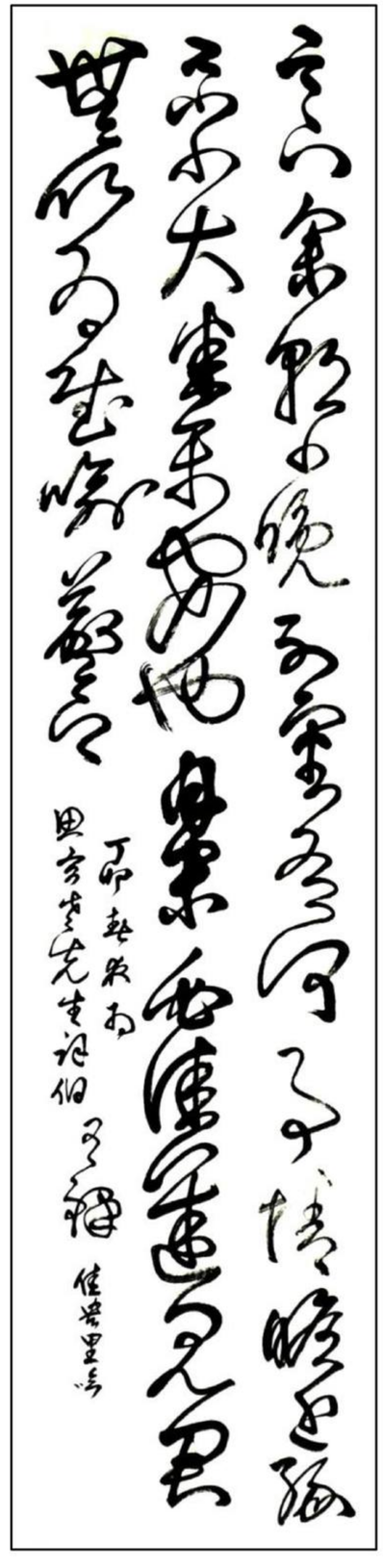
（合同作品担当　尾崎由布子）

一、　東佳央里

臨書　草書　「王鐸『臨王羲之瞻近帖』」　二尺×八尺

「足下參朝。少晩不審。有何事情。瞻近(無)縁(省苦。)足下小大悉平安也。月末必佳。遲見君。無以爲慰喩。羲之。丁卯春夜爲思玄老先生詞伯。王鐸。」

王鐸には初挑戦です。草書は2度目なので少し成長できているといいなと思います。縦軸が左右に大きく揺れ、線の太さも様々だけどまとまっている、そんな特徴を表現しようと頑張りました。



二、　糸井健太

臨書　行書　「王鐸『家中南澗作』」　二尺×八尺

「家硼誰登眺。天寒草木稀。雨餘孤岫出。日莫衆禽依。諸寇郡仍緊。三年人未歸。石壇偃臥否。處々野棠飛。」

好き嫌いの変遷が行きついた先です。はじめは整った楷書ばかりが好きだったはずなんですけども。気楽に見てください。



三、　岡田卓也

臨書　楷書　「元顕儁墓誌銘」　二尺×八尺

「若望舒盪魄年成歳秀若騰曦潔草松隣竹侶熟仰歎矣是則慕學之徒無不欲軌其操既成之儒」

幹部として最後の書展になります。二八で楷書はやはり骨が折れますが楽しかったです。端正でありながら力強い感じを出せるよう努力しました。ご批評お願いします。



四、　木谷亮太

臨書　行書　「顔真卿『祭姪文稿』」　二尺×八尺

「人心方期戡穀何圖逆賊閒釁稱兵犯順尒父竭誠」

顔真卿が甥を逆賊に討たれたさいに悲憤を綴った書です。彼の字は心を能く表すといわれます。そこに惹かれこの書を選んだのですが、雑念が多かったのか、中々さ迷った作品となったようです。



五、　鈴木新人

臨書　行草　「張瑞図『行書詩巻』」　二尺×八尺

「自種吾堂景無人共把卮昨來三徑雨忽興兩驄期欄霽花庭爽林寒酒故随坐忘俱酩酊莫遣白衣知　果亭山人瑞圖」

初めての二八作品で、とにかく作品にすることを目指しました。瑞図のキレのある線が出せていたら本望です。ご批評のほどよろしくお願いします。



六、　鈴木新人　大庭諒介

創作・合作　墨絵×行書　「蛟龍得雲雨図」　二尺×六尺

「蛟龍得雲雨　終非池中物也」

詩文は『呉書』（周瑜伝）から取りました。蛟龍が雨に打たれ雲に乗り、池の中から勢いよく飛び出す、そして天高く飛び出す。その様を線の濃さや強弱によって表現しました。



七、　時藤大典

臨書　草書　「傅山『沈佺期詩』」　二尺×八尺

「濯龍門外主家親、鳴鳳樓中天上人。自有金杯迎甲夜、還將綺席發陽春。」

二八作品は初めてになります。初めは形臨に徹しましたが、最終的には構成を変えるなど、だんだん意臨に近づいたと思います。じっくりとした線やスピード感のある線など、変化を付けたつもりです。ご批評宜しくお願いします。

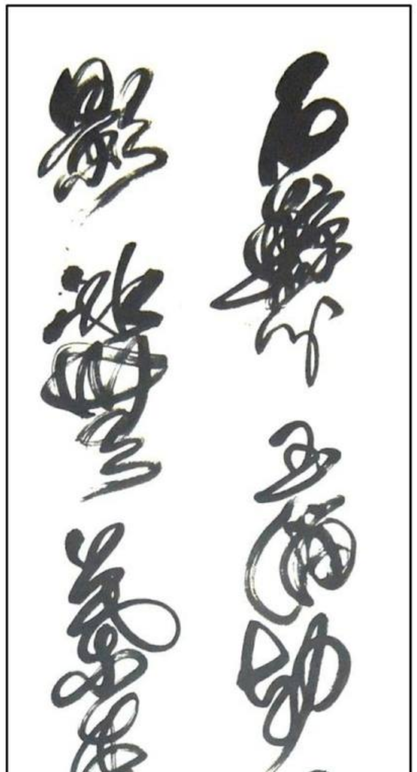


八、　中川和也

創作　草書　「石鯨―傅山に倣って―」　二尺×八尺

「石鯨分玉溜劫燼隠平沙柳影氷無葉梅心凍有花」

傅山の書から、「潤」と「流」と「回」というエスプリを抽出した。この作の生命線は中央に走る行間の響きだと考える。２行の黒でなく、脊髄たる「白」を見てほしい。

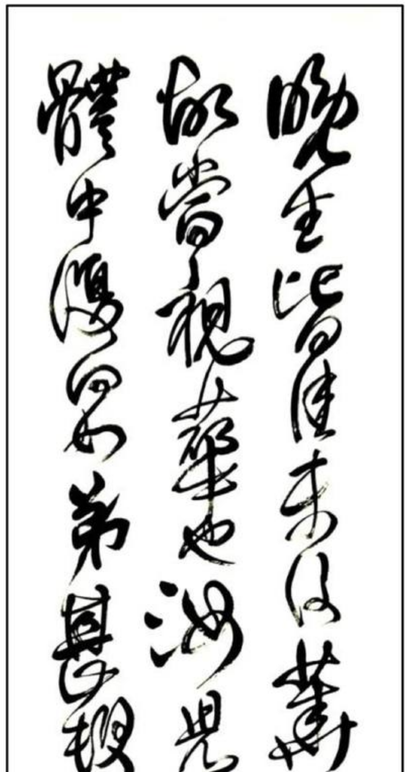


九、　中野周平

臨書　行書　「王鐸『臨王獻之發吳興二十九日帖幅』」　二尺八尺

「晩生皆佳。未復華姜疏。比(此)來得直疏、故惡故當視華也。汝兒女可不。昨遂不奉。恨深。體中復何如。弟甚頓、勿勿不具。丁亥上巳日。上巳世譌爲己未、有更者。王鐸。」

「大きくてウネウネしたのが書きたい！」…王鐸も二八もかなり背伸びでした。中心軸がずれているという特徴を掴むのにまず一苦労。それでいて整って見せるのは至難の技…。相手は大物。しかし得たものも大きいです。



十、　西村有希子

臨書　草書　「傅山『懸崖斷處七言詩軸』」　二尺×八尺

「懸崖斷處積幽寒　濃樹如雲黒一團　莫道山中無結構　茆簷趁水有闌杆」

いろいろな書体への挑戦その4、今回は連綿草です。二八に書くのも初めてで、初めてだらけの作品です。構成や直筆が難しかったです。傅山向いてないんじゃないかと嫌になった時もありましたが、勉強になりました。

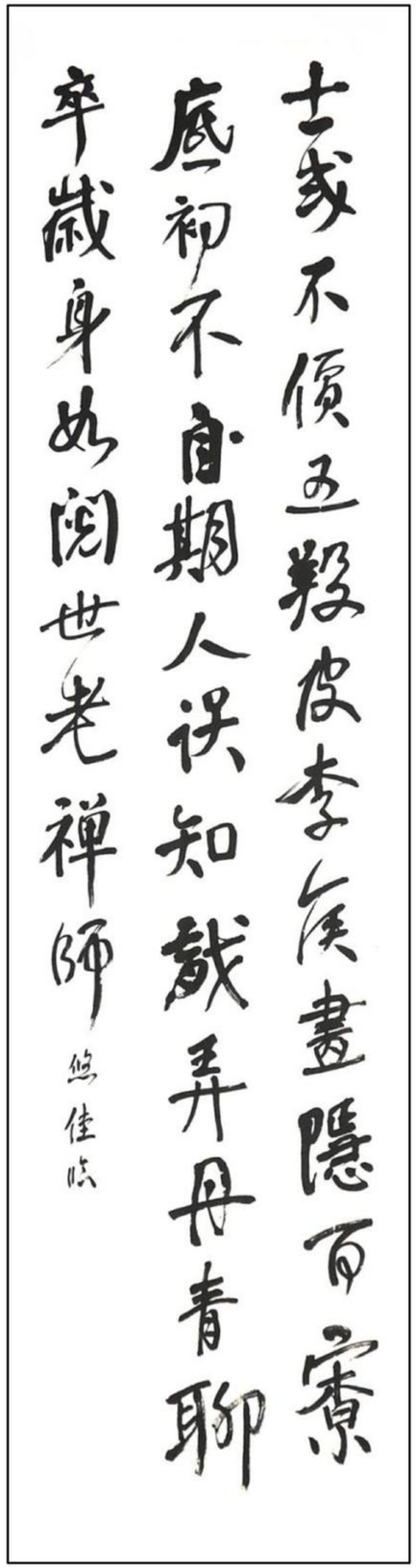


十一、林田悠佳

臨書　行書　「何紹基『畫馬贊』」　二尺×八尺

「士或不價五羖皮李侯畫隱百寮底初不自期人誤知戲弄丹青聊卒歲身如閱世老禪師」

揺れている線が書きたくてこの法帖を選びました。羊毛の筆を使うのは初めてで楽しかったです。“閲”の字が顔に見えるので、どれだけかっこよく書いてあげられるかが苦労した点です。



十二、松村貴史

臨書　行書　「王鐸『香山寺作』」　二尺×八尺

「細逕翠微入。幽香塵跡稀。虚潭留色相。響谷發清機。人淡聽松去。僧閒洗藥歸。莫窺靈景外。漠々一鷗飛。香山寺作。」

多くの先輩方が書かれたのを見て、それに憧れて書いたのに、それを作品で再現しようとするとあまりうまくいかなくて、やっぱり王鐸はすごいと思うばかりです。法帖を見る限り行が揺れているように見えて、やっぱり王鐸はすごいと思うばかりです。



十三、松村貴史

臨書　隷書　「楊岘『隷書幅』」　二尺×八尺

「密記其声調遂回郤顧其橋随歩而滅旦召今官依其声作霓裳羽衣出曲　庚寅夏日　七十二嶺岑　楊岘」

去年の秋季書展に続いてまた楊岘にチャレンジしました。前回よりは上手く臨書できるようになったとは思えるようになりました。楊岘の楽しい変化のある字をもっと雰囲気がでるように書けるようになりたいです。



十四、植島寛之

臨書　楷書　「墓誌銘」　半切

「翠帳凝塵朱蒼留月慨矣天長嗟乎」

いかに鋭く書けるかに重点を置きました。彫られた字がかなり尖っていて（特に『朱』の四画目）筆で表現できずに苦労しました。



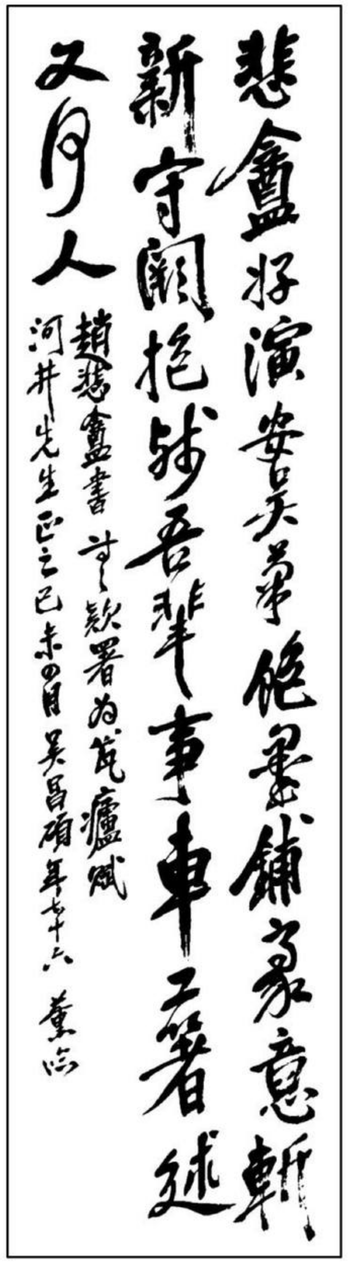
十五、小川薫

臨書　行書　「呉昌碩『七言絶句幅』」　半切

「悲盦好演安呉筆、飽墨鋪豪意斬新。守闕抱殘吾輩事、車工箸述又何人。」

生正之。己未四月。呉昌碩。年七十六。」

この法帖の勢いのあるさっぱりとした線質が気に入り、臨書してみました。字数ではなく、線質の勢いから出てくる全体としての重々しさと迫力を表現することに苦労しました。ご批評よろしくお願いいたします。



十六、尾﨑由布子

臨書　破体　「顔真卿『裴将軍詩』」　三尺×六尺

「裴將軍大君制六合猛將清九垓戰馬若龍虎騰陵何壯哉將軍臨北荒恆赫燿英」

破体字に初挑戦しました。作品の完成像がなかなか想像できず、悪戦苦闘しました。もとが個性的で奔放なので、かえって自分で遊ぶ勇気が出せなかったのが残念です。もっと勉強して、いつかリベンジしたいです。



十七、近藤和歌子

臨書　楷書　「褚遂良『雁塔聖教序』」　半切

「大唐三藏聖教序太宗文皇帝製盖聞二儀有象顯覆載以含生四時無形潛寒暑」

ゆったりとした雰囲気に惹かれて、書いてみました。線の太いところと細いところの違いを出そうと苦戦しながらも、楽しく書くことができました。未熟な作品ですが、ご批評お願いします。

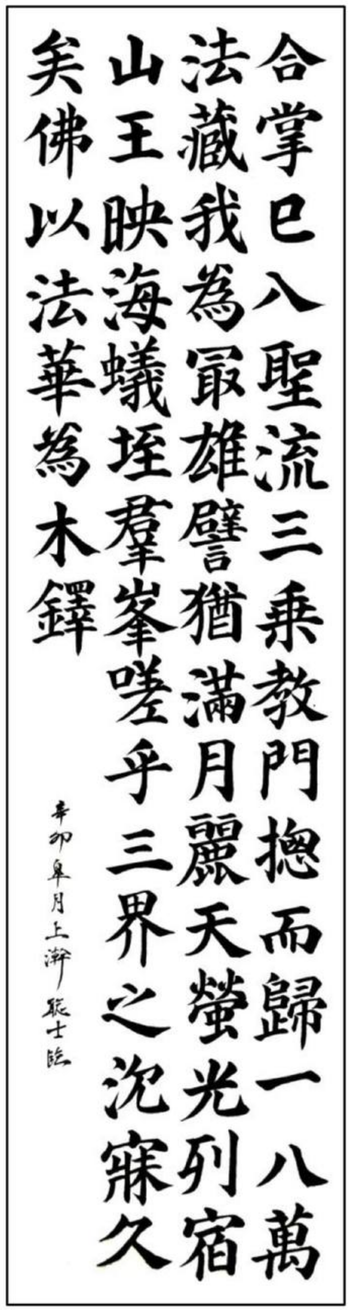


十八、永溝聡士

臨書　楷書　「顔真卿『多寶塔碑』」　半切

「合掌已入聖流…」

書くのが遅いので、一枚書くのに四時間くらいかかってしまいます。最後のほうは気が抜けているのでうまく隠せていれば幸いです。



十九、東佳央里×内村実穂

創作　調和体　「高橋優『福笑い』より」　全紙

「きっとこの世界の共通言語は英語じゃなくて笑顔だと思う
笑う門に訪れる何かを愚直に信じて生きていいと思う」

(東)壮大だけど身近で、あたたかみと共に真っ直ぐに素直に心に響いてくるような、そんなこの詩の、高橋優さんの世界を壊すことのないように、作品にしてみようと頑張りました。すごく楽しかったです。

(内村)体当たりです。ふたりで、ああでもない、こうでもない、一体何が良いのだろうかと試行錯誤した産物となります。「書く」ことのおもしろさ、楽しさを再認識することができ、良い経験となりました。

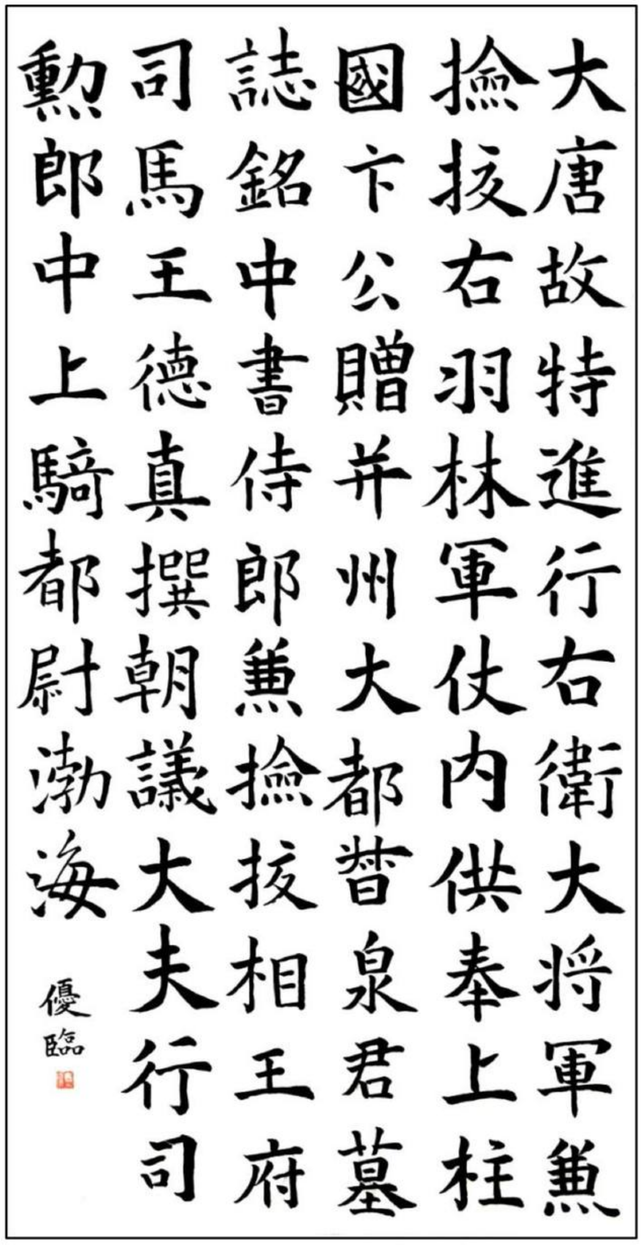


二十、奥山優

臨書　楷書　「欧陽通『泉男生墓誌銘』」　全紙

「大唐故特進行右衛大将軍兼撿挍右羽林軍仗内供奉上柱國卞公贈幷州大都督泉君墓誌銘。中書侍郎兼撿挍相王府司馬王德眞撰。朝議大夫行司勳郎中上騎都尉渤海」

初めての全紙作品です。縦の行と横の列をそろえて書くのに苦労しました。まだまだ未熟な作品ですが、少しでも原本に似せるように一字一字丁寧に書いたのでご批評のほどよろしくお願いします。

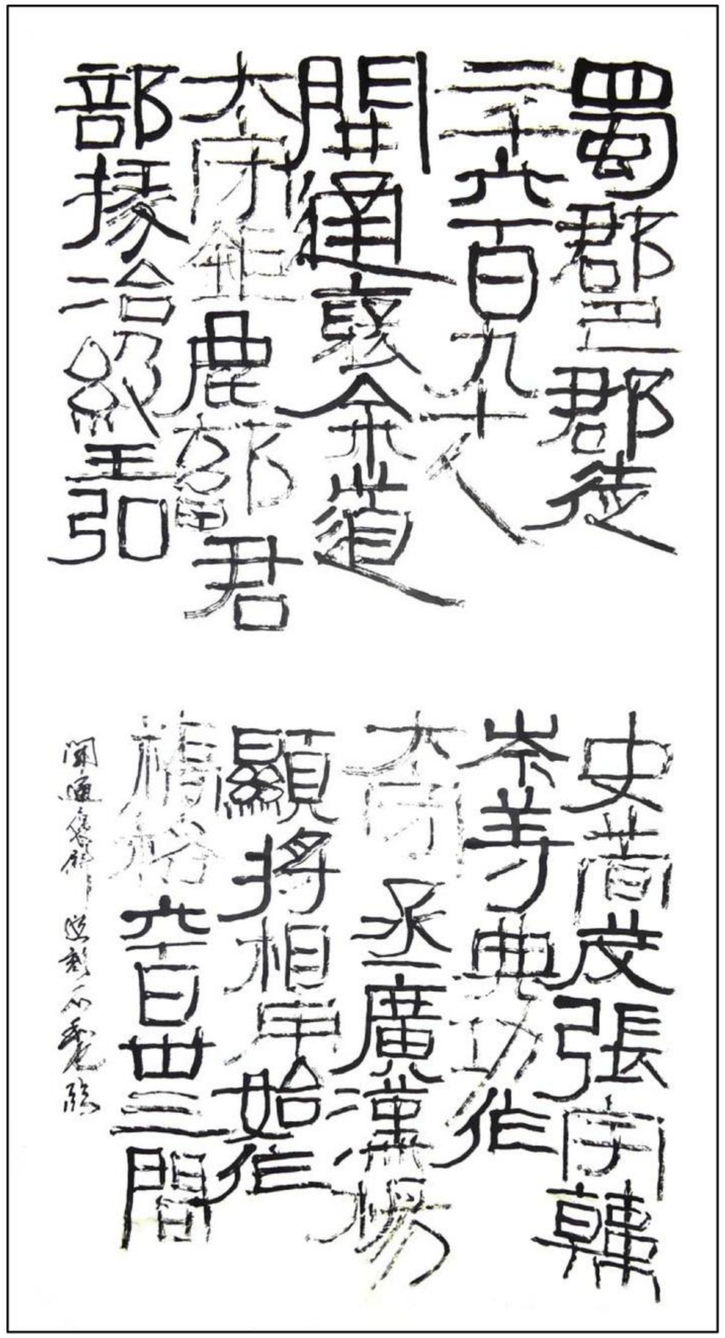


二一、中川和也

創作　隷書　「開通褒余道刻石」　全紙

「蜀郡巴郡徒二千六百百九十人開通褒余道太守鉅鹿鄗君・・・以下略」

「素朴」かつ「雄大」。瑣末な空間配置などといった美意識をはるかに凌駕する生命力がこの刻石にはひめられている。現代にこの碑文はモダンな形で生まれ変われたであろうか。



二二、脇本啓太

臨書　楷書　「鄭道昭『鄭羲下碑』」　全紙

「驎碑草公諱羲字幼驎司州滎陽開封人也肇洪源於有周胙母弟以命氏桓」

この碑文から感じた素朴でどっしりとした強さに、一文字一文字、自分の手でどこまで血を通わせることができるか。そういった気持ちで臨みました。ご批評、よろしくお願いします。



二三、大庭諒介

臨書　行書　「蘇軾『黄州寒食詩巻』」　半切二幅

「空庖煮寒菜　破竈焼湿葦　那知是寒食　但見烏銜帋　君門深九重　墳墓在」

蘇軾の『黄州寒食詩巻』です。蘇軾らしい感情の滲み出たような書風で、作品にするのも大変苦労しました。ただ、この作品を通じて自分の書きたい「書」が、ほんの少しだけ見えた気がします。





二四、北山聡佳

創作　調和体　「留学に向けて―日本へそして同期へ―」　半切二幅

「日本は大変な時だけどこの強い国に生まれたから私は行こうそして
思い出と勇気をくれた四回生へありがとう早めの卒業おめでとう」

京大書道部４回生の皆さんへ

私は大学院から入部しましたが、皆さんの同期としてとても楽しく過ごせました。しかし、皆さんの卒業の頃に、私は留学しているかもしれません。本当にごめんね。今までありがとう！





二五、西村有希子

臨書　篆書　「呉昌碩『臨石鼓文四屏』」　半切四幅

「田車孔安…」

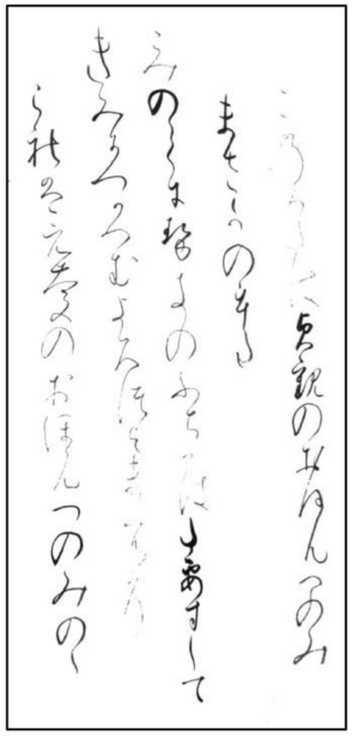
いろいろな書体への挑戦その5、今回は篆書です。はじめはどうやって書くの?という感じでしたが、図形的な文字の形にすっかりはまってしまいました。字形より線、特に起筆と終筆に苦戦しました。そして字数が地味に堪えました。



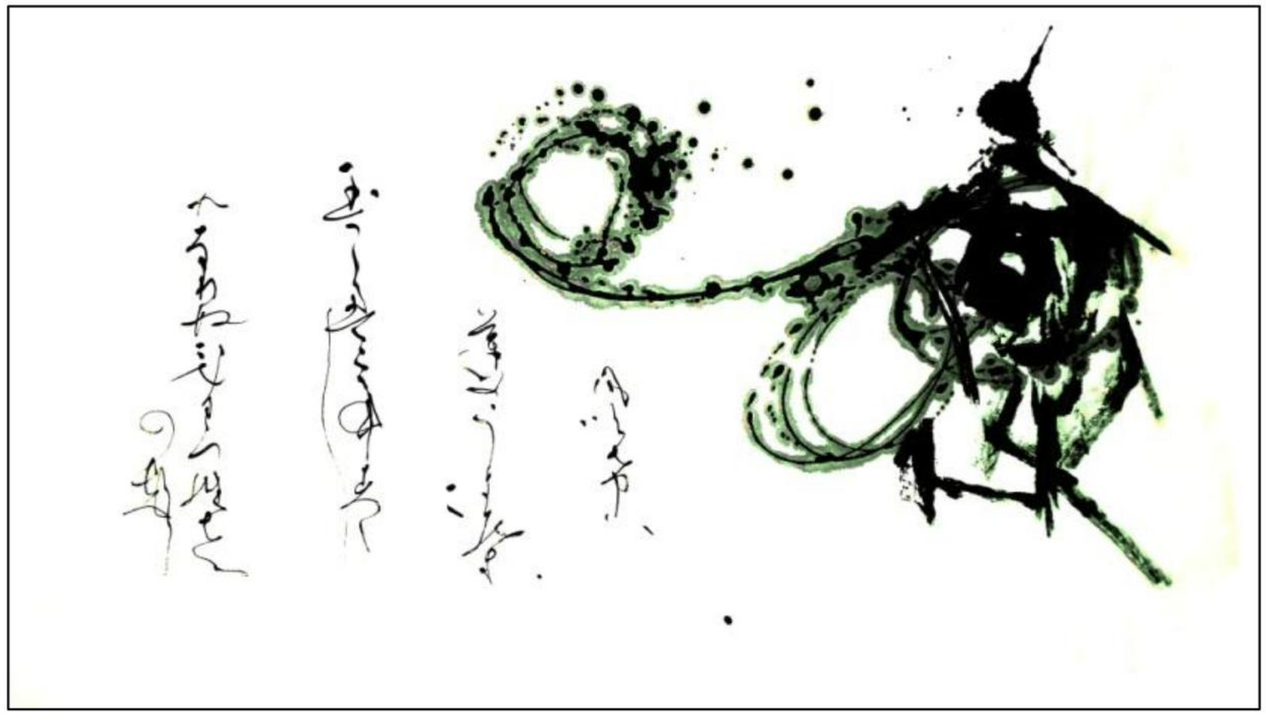
二六、河合直樹
創作　楷書　「施」　タテ３．５尺×ヨコ４．５尺
「施(ほどこ)す」
今回の主題は「深み」です。紙背に沈着する線質を追求しました。綜てを包容する「布施」の精神が、文字の深奥からじわりじわりと滲み顕われてくるさまを表現したつもりですが、他方、心技の未熟さを痛感しています。



二七、内村実穂
臨書　仮名　「高野切第一種」　巻子
「あたらしきとしのはじめにかくしこそちとせをかねてたのしよをつめ…」
長いものを書きたい、高野切を書いてみたいと思い挑戦しました。書けば書くほど、練習するほど、ますます仮名が好きになりました。まだまだ未熟者ではありますが、「好きこそものの上手なれ」を目指し、これからもどんどん練習に励もうと思います。



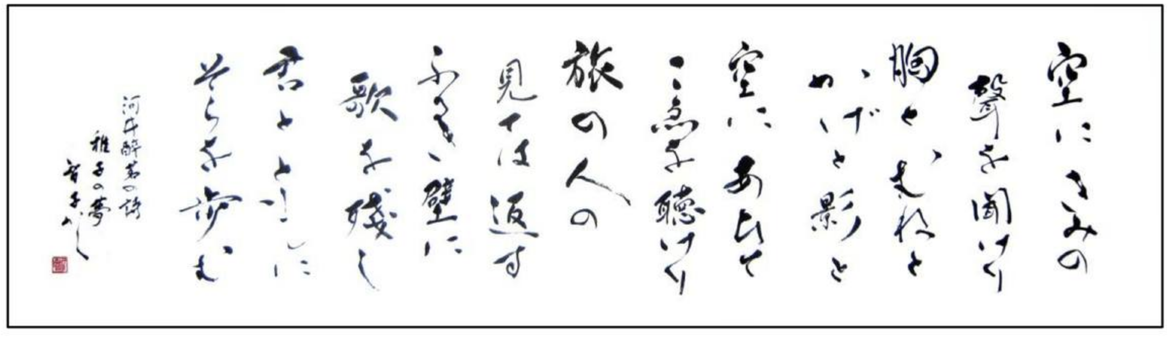
二八、中川和也×北山聡佳
創作・合作　仮名×墨象　「風吹けば―凜―」全紙横
（中川）流麗な線、確固たる構造。書は、対立と接近の果てに弁証法的に昇華されるのではないだろうか。表意性と含意性、具象性と抽象性。これらの対立の果てに書はいかなるか。未踏の境地に、共に挑んでいただいた
北山さんに感謝しつつ。
（北山）他人の清書に加筆する躊躇い、緊張感――しかし障害は信頼と勇気に変わり、大きな可能性を導いた。昨秋交わした夢が今、実現する。あらゆる壁を越えて、共に挑んでくれた中川君に感謝しつつ。



二九、松永智子
創作　調和体
「河井酔茗（1874～1965）『稚子の夢』より」半切横

「そらに きみの こゑを きけり
むねと むねと かげと かげと
そらに きみの こゑを きけり
たびの ひとの みては かへす
ふるき かべに うたを のこし
きみと ともに そらを あゆむ」

活字表現の面白さを書に起してみました。詩のもつ視覚的・聴覚的リズムが、鋭利と静観、かなしみとよろこびの入り交じる抽象的な戀を伝えます。
―詩人のことばが文字になり活字となって、印刷されて詩集となる。その詩が読まれ、咏まれるとき。文字はふたたび「ことば」となって、わたしの前に立ち現れる。甦る。―ことばをめぐる音と文字、リズムとデザインの軌跡を感じていただければ幸いです。



三十、山口　萌
臨書　草書　「傅山『行草五言古詩巻』」二尺×八尺横

「狼藉等杏李厥田唯下々。厥貢海物美八閩之風味。日輸沙塞鄙…」

初めての二八です。“鄙”の字に魅かれて書き始めたこの作品。最初は筆の動きが楽しくて仕方がありませんでした。でも書けば書くほど欲しい線が分からなくなる罠にはまりました笑。もがき苦しんだけど、やっぱり楽しかったです。



三一、米田直紀

臨書　隷書　乙瑛碑　全紙横

「孔子廟百石卒史掌一置禮器罔魯可明給恐酒犬直他如故恭祠于」

掛け持ちサークルの看板製作に端を発した、初の隷書作品。三回生にして初めてのことだらけで、戸惑うことばかり。均整のとれた重厚な字形と、インパクトのある筆遣いの対比を、感じて頂ければ幸いである。

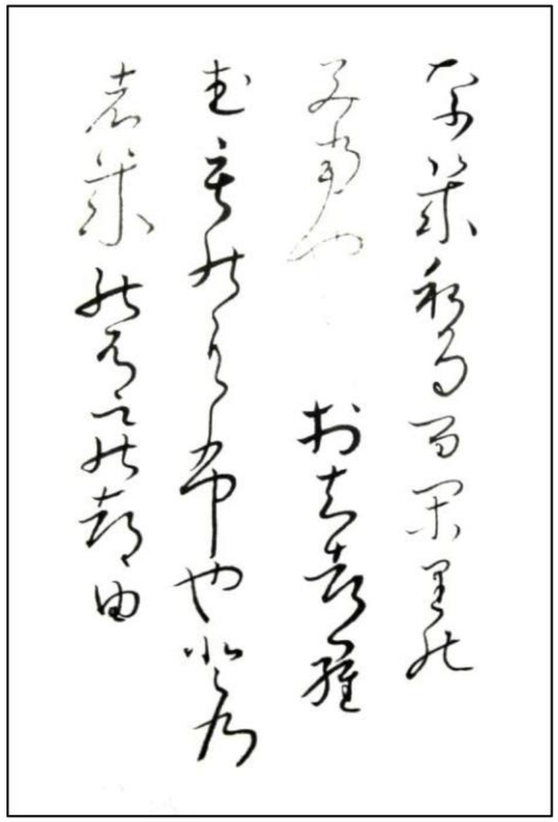


三二、米田直紀

臨書　仮名　「小野道風『秋萩帖』」　一尺×六尺

「安幾破起乃　之多者以呂都久　以末余理処　悲東理安留東乃　以祢可転仁数流　他９首」

漢字の要素が残る仮名を書きたい、と思って取り組んだ作品。秋萩帖特有の、文字のメリハリを意識した。練習不足な感は否めないが、柔らかな線の中にも、ちょっぴり力強さを感じて頂ければと思う。



―禅居庵―

三三、植島寛之

臨書　楷書　「王羲之『東方朔画賛』」　半切

「枝離覆逆之數」

創作みたいですけど実は臨書だったりします。六文字の一文字一文字がメインで違う味を出せるように頑張りました。ナンバーワンにならなくてもいい、元々特別なオンリーワン。



三四、小野愛実

臨書　行書　「文徴明『行書詩巻』」　半切

「碧山收雨緣陰成。白苧翻歌夏意清。春」

右上がりで勢いがある、美しい字形に惹かれました。「碧」という字が特に好きです。まだまだ未熟な作品ですが、御批評よろしくお願いします。



三五、小林　真由美

創作　行書　「漢字創作」　半切

「峨眉山月半輪秋影入平羌江水流」

初めて行書に挑戦したのですが、流れを意識し、行書の柔らかな感じをだせるようにと意識しました。季節外れですが、雄大な風景が思い浮かんで大好きな書です。皆様にもそのような雰囲気が伝われば幸いです



三六、佐藤綾美

臨書　行書　「蘇軾『前赤壁賦』」　半切

「旗蔽空釃酒臨江横槊賦詩固一世之」※一部当日作品と構成が変化しています。

（当日）「旌旗蔽空釃酒臨江横槊賦詩固一世之雄」

初めて臨書に挑戦しました。独特な線の感じを出すことや、全体のバランスをとることにとても苦労しました。格好良さを表現しようと頑張りました。ご批評よろしくお願いいたします。



三七、仁位元信

臨書　楷書　「褚遂良『孟法師碑』」　半切

「小魯賤其戸庭若披雲…」

二度目の出品です。今回は楷書に挑戦しました。鋭い線を出すのが難しく、なかなか納得のいくような線を出すことができませんでした。ご批評よろしくお願いします。



三八、真殿知佳

創作　楷書　「列子」　半切

「欲剛必以柔守之欲強必以弱保之」

楷書に挑戦しました。点が多く、難しかったです。ご批評よろしくお願いします。



三九、横山成基

創作　調和体　「世界にひとつだけの花」　半切

「そうさ 僕らも世界にひとつだけの花」

ＳＭＡＰの「世界にひとつだけの花」です。歌詞にもあるように、ひとりひとり違って、だからこそいいんじゃないか。枠にとらわれない生き方をしていきたい。この作品を通してそのことが伝われば、嬉しい限りです。



四十、脇本啓太

臨書　行書　「橘逸勢『伊都内親王願文』」　半切

「愛憎而普度尊敬者混善惡而咸矜」

ある種の妖艶さに惹かれ、この古典を選びました。この書から伝わってきた、のびやかにしなやかに感情を持った線の流れを一体どこまで再現することができたか。ご批評よろしくお願いします。



四一、近藤和歌子×東佳央里×山口萌×内村実穂

臨書・合作　行書　「文彭『三橋』」　全紙4分の3

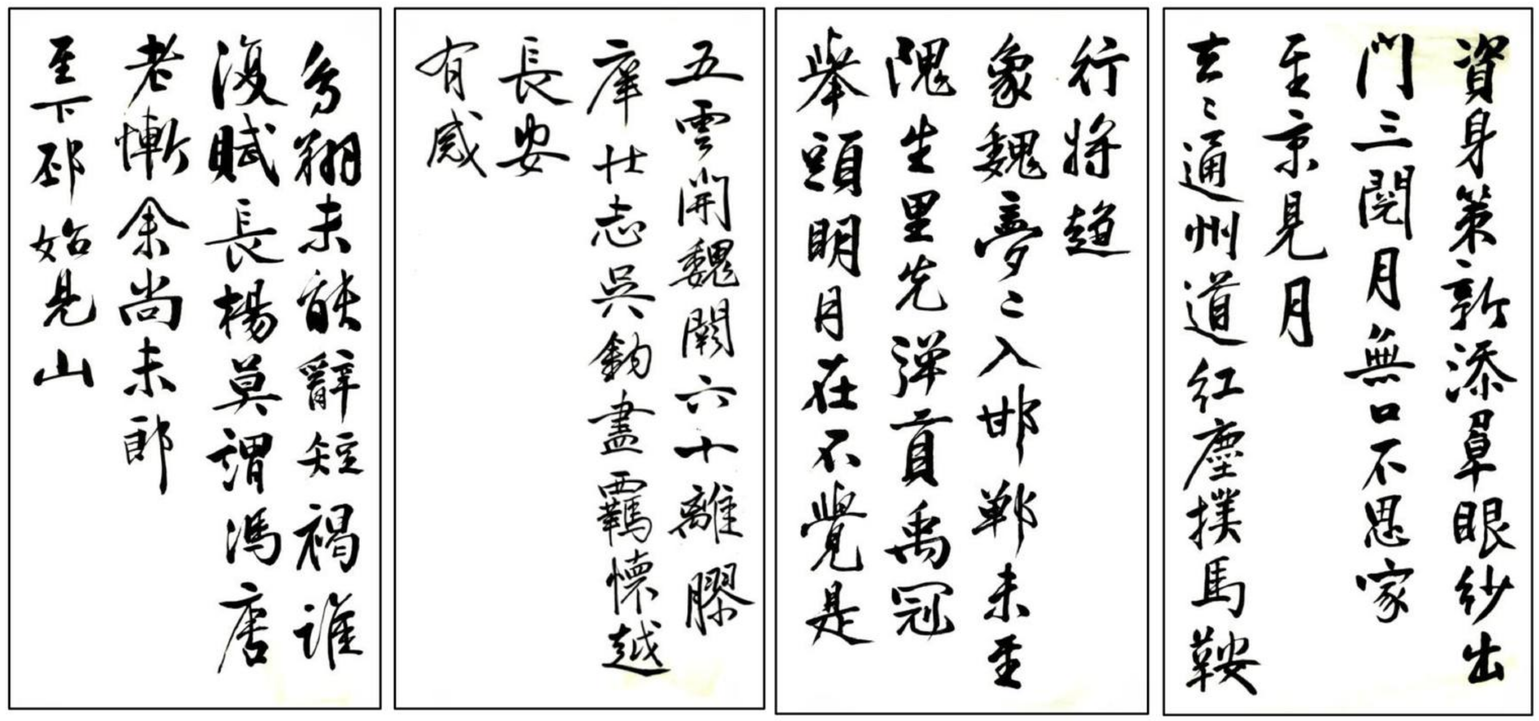
「資身策〇添〇眼紗出門三閲月無口不思家至京見月
玄己通州道紅塵撲馬鞍
行将道象魏夢々入邯鄲未至隗生里先彈貢禹冠擧頭
明月在不覺是
長安有感　五雲海魏闕六十離膠雜〇壮志呉〇〇懐越
鳥翔未能辭短褐雜復賦長楊莫所謂馮唐老慚余尚未
郎至下邳始見山」

(近藤)楷書しか書こうとしない私にとって、行書は未知の世界でした。うまく書けず難儀し、他のメンバーのレベルの高さに焦りを感じながらも、回生を超えた合作という貴重な体験ができました。合作に誘ってくれたことに感謝しています。

(東)私は初めて臨書の合作に挑戦しました。この法帖は線が特徴的で、4人それぞれが書いたものを一作品にしていくのは大変でしたが、1人での作品制作とは違った楽しさや難しさがあって良い経験になりました。

(山口)初めての合作です。傅山の癖が全然抜けなくて困りました。後の三人の雰囲気が似てくる中、完全に置いてきぼりになりました笑。線の肉付きや鋭さを意識して書きました。

(内村)久しぶりに大きな筆を持ちました。はらいやはねに戸惑ってしまったことが紙面に表れていないことを願うばかりです。4枚の中の1枚。見劣りすることがあってはならない！頑張りました。

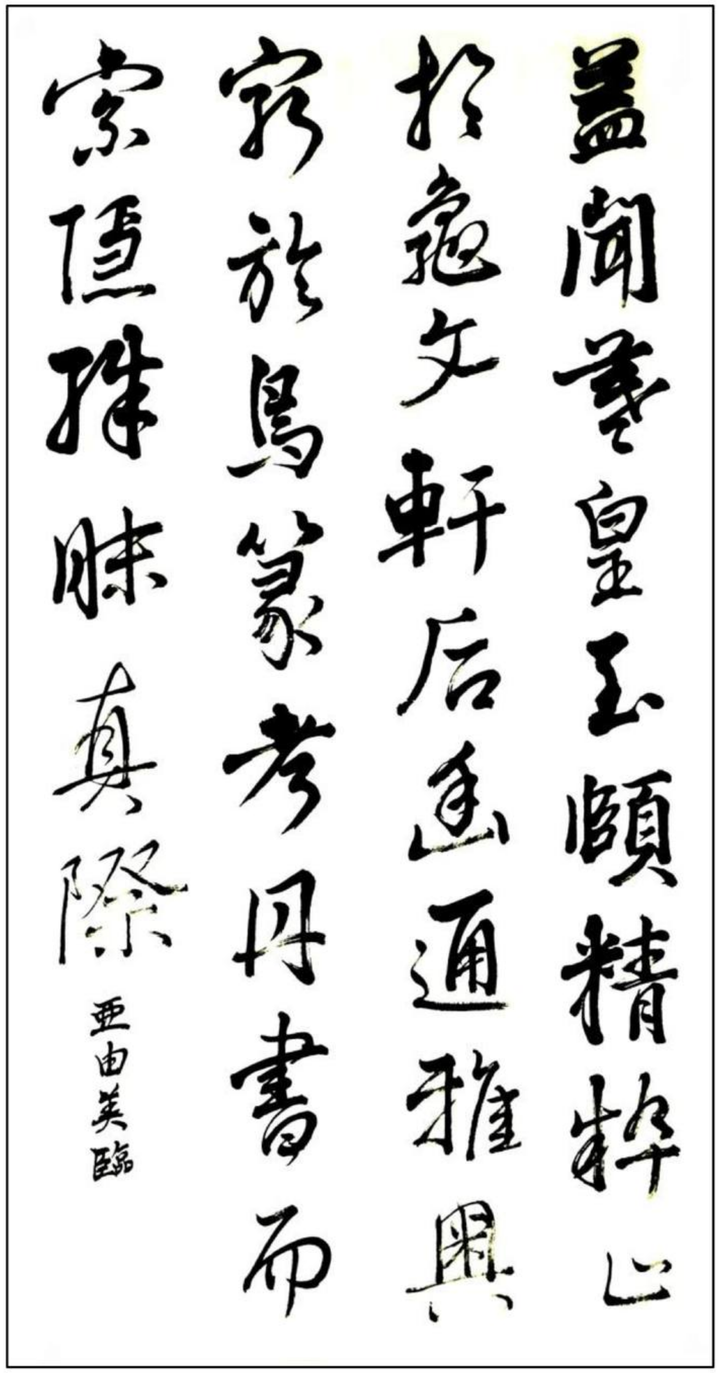


四二、池田亜由美

臨書　行書　「董其昌『菩薩蔵経後序』」　全紙

「蓋聞羲皇至頤　精粋止於龜文　軒后幽通　雅奥窮鳥篆　考丹書而索陰　殊昧真際」

董其昌の洗練された雰囲気にひかれ、今回初めてチャレンジしました。実は全紙に書くのもこれが初めてで大変でした。



四三、糸井健太

臨書　行書　「空海『忽披帖』」　全紙

「忽披枉書已銷陶尓。御香兩裹及左衛士督尊書状並謹領訖。迫以法」

見ていて高揚感を感じられるものを、自分で書きたいと思って取り組みました。でもやはり、自分の書ではムハムハできません。空海さんが（たぶん）本気で書いた御手紙です。

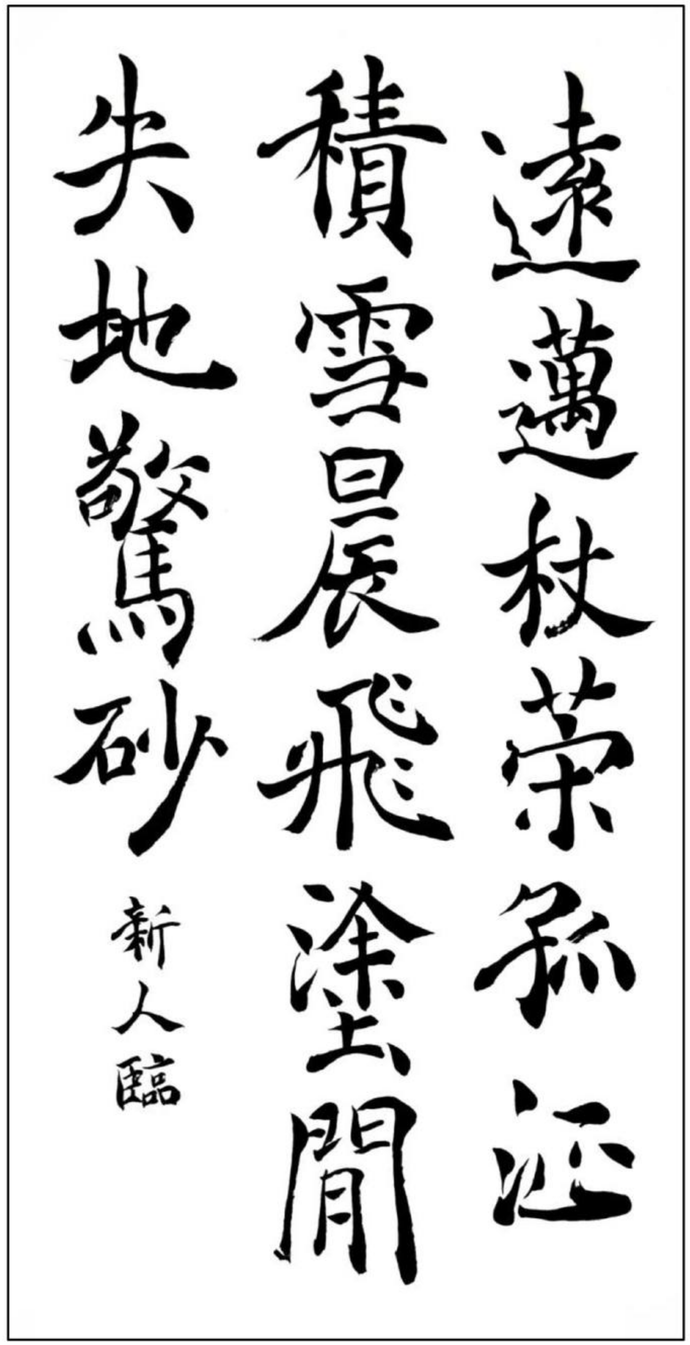


四四、鈴木新人

臨書　楷書　「褚遂良『雁塔聖教序』」　全紙

「遠邁杖策孤征積雪晨飛塗間失地驚砂」

線質にこだわり、存在感のある文字を目指しました。これからも楷書の探究を続けていくつもりです。

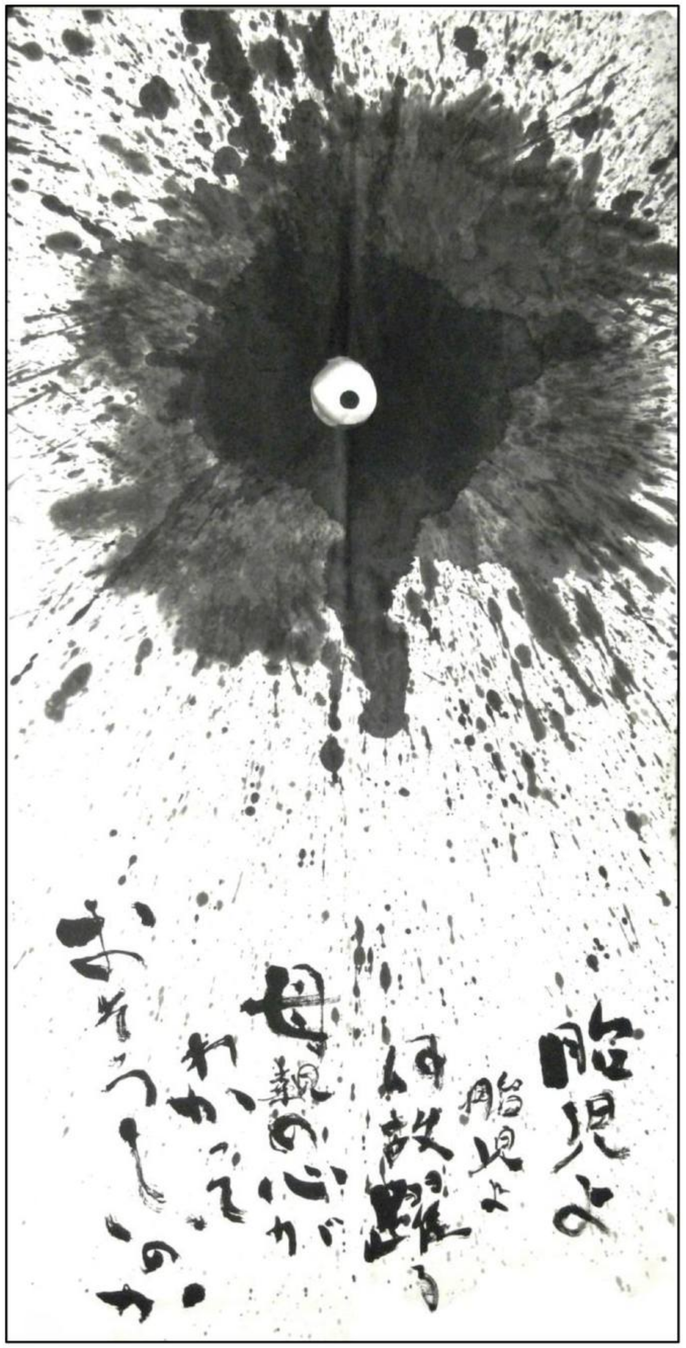


五、時藤大典

創作　前衛書・調和体　「胎児の夢」　全紙

「胎児よ胎児よ何故躍る　母親の心がわかって　おそろしいのか」

夢野久作著、『ドグラ・マグラ』からインスピレーションを受けて制作しました。自分なりに表現や表現手法に意味を持たせましたが、〝表現シタイコト〟を十分に（満足に）表現しきれたか、今後の課題となりそうです。質問等あれば遠慮無く仰って下さい。

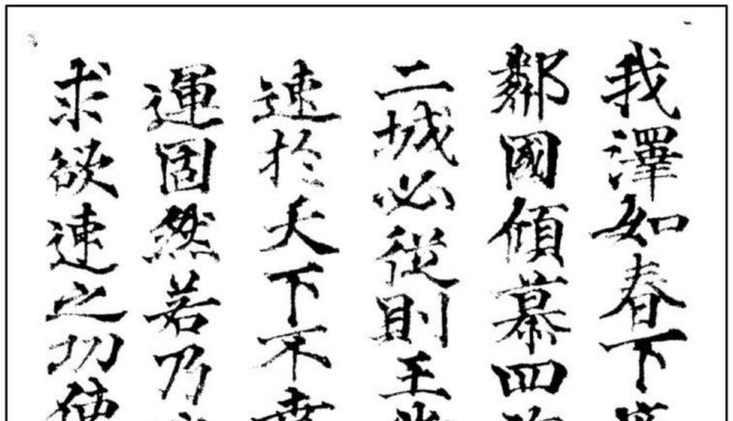


四七、中川和也

臨書　楷書　「光明皇后『楽毅論』」　全紙

「我澤如春下應如草道光宇宙賢者託心鄰国傾慕四海延頚思載燕主仰望風聲二城必従則王業隆矣雖淹留於兩邑乃致速於天下未幸必變世所不常運固然若乃遁之以威刦之以兵則攻取之事求欲速之功使燕齊之士流血於二城」

この古典を久しく想い続けた。どうもつれない相手だとつくづく思う。字間の密と行間の疎。線の気。どうも暫くは僕になびいてはくれなさそうだ。男としては非常に困る。

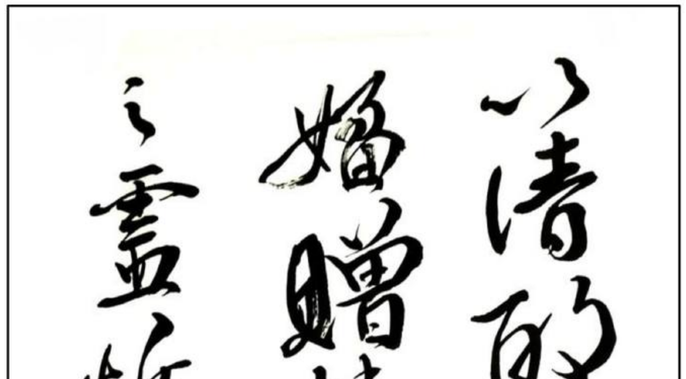


四八、水谷慈

臨書　行書　「顔真卿『祭姪文稿』」　聯落

「以清酌庶羞。祭于亡姪・贈賛善大夫季明之霊。惟尓挺生。」

顔真卿に初挑戦です。柔らかくてダイナミックな線質に惹かれました。書いてみると楽しく、顔真卿を食わず嫌いしていたことを少し反省しました。ご批評のほど、よろしくお願いします。



四九、糸井健太

創作　楷書　「五言楷書対聯」　半切二幅

「君看雙眼色」「不語似無憂」

むかし尊敬する方が紹介されていたため知った句です。様々な文意の解釈の仕方があるみたいです。



五十、大庭諒介

創作　篆書　「夢心」　半切二幅

「夢繞邊城月」「心飛故國櫻」

詩文は李白『太原の早秋』から取りました。漢詩の美しさに魅せられて、この詩文を作品にしてみました。篆書初作品なので、線を楽しむ気持ちで精一杯に書きました。



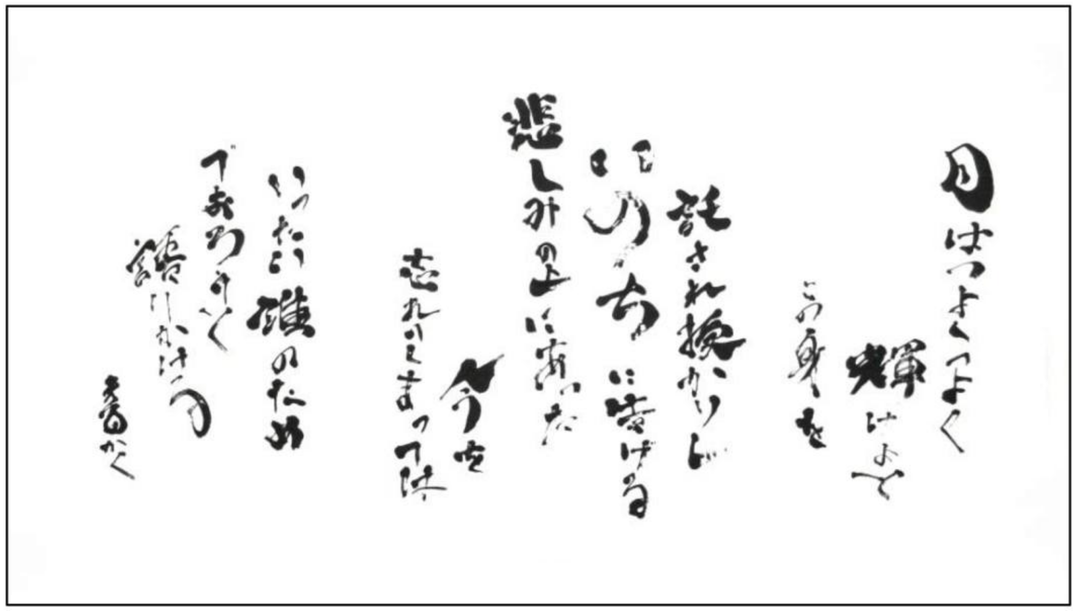
五一、尾崎由布子
創作　金文　「塩梅」　全紙横
「塩梅」
スカッとしたい！横向きにも書いてみたい！と思いつきで書き始めたのですが、悩みながらも楽しく書くことができました。題材は、意味が好みである上に、漢字が美味しそうだったという個人的チョイスです（笑）



五二、梁悦
臨書　かな　「伝小野道風『継色紙』」　30.3×15.2
「よのなかは　かくこそあ　りけれ　ふくかぜ　のめに見　ぬ人は　こひし　かりけり」
中国でずっと漢字を書いてきましたが、初めてかなに挑戦してみました。すごいです。その線の美しさと奥深さに魅了されつつ、書道の楽しみを体感する日々を送っています。



五三、木谷亮太
創作　調和体　全紙横
「Every Little Thing「azure moon」より」
曲名を和訳すると蒼い月。Vo.持田さんの美声をまるで表現してないのはご愛敬。迷い悩み疲れ果てた時に思い出し、勇気づけられる、そんな原曲のやさしさと力強さを少しでも表現できればと思いました。現代のストレス社会に。



五四、吉田幸広
創作　調和体　「霧の摩周湖」　半紙
春に布施明さんのコンサートに行きました。その時会場近くの本屋でかな交じり書の本がたまたま安く販売されており、購入しました。折角なので布施明さんの名曲『霧の摩周湖』を書いてみました。





This book was
made by the LeME